

太田フォトスケッチ vol. 2

て・あし・まち 「K I K I トークショー」

日 時：2017年11月5日（日） 午後2時～3時

会 場：太田市美術館・図書館 3F 視聴覚ホール

出 演：KIKI（モデル、写真家）

古川 誠（オズマガジン編集長）

..... 出演者 プロフィール



Photo:Kousuke Matsuki

KIKI（キキ）

東京都出身。モデル、写真家。

武蔵野美術大学造形学部建築学科卒。

雑誌をはじめ広告、テレビ出演、映画などで活躍。エッセイなどの執筆も手掛け、旅や登山をテーマにしたフォトエッセイ『美しい山を旅して』（平凡社）など多数の著書がある。ドイツのカメラブランド、ライカの会報誌であるライカスタイルマガジンにて撮りおろしの写真とエッセイを担当。近年では自身の写真展『PRISMA』シリーズを発表、また芸術祭に作家・審査員として参加するなど多方面で活動している。



古川 誠（ふるかわまこと）

オズマガジン編集長

埼玉県出身。

幼少時代・高校時代を群馬県で過ごす。

雑誌編集の傍ら文筆家としても活動中。

小説「りんどう珈琲」（クルミド出版）が発売中。

2018年「ハイツひなげし」（センジュ出版）を刊行。

出演者挨拶

古川：改めまして、皆様こんにちは。

KIKI：モデルであり、写真家の KIKI です。よろしくお願いします。

古川：東京で「オズマガジン」という女性誌を編集している古川です。KIKI さんとは2016年の6月まで8年間、月刊誌「オズマガジン」の表紙にご登場いただき、月1回の表紙撮影に加え、「KIKIの朝 PHOTO 日記 early bird」という、KIKI さんが写真をとって街を歩くという内容の連載も9年位やっていたので、月に1回はお仕事をしていました。

KIKI：今日なぜ古川さんをトークショーの相手役に選ばせていただいたかという、古川さんが群馬県にご縁がある(高崎市生まれ、東京農業大学第二高等学校出身)ということが一つ、もう一つが毎年8月～9月に「オズマガジン」で「アートを旅する」というテーマの特集を作られていて、今年の特集の中で「太田市美術館・図書館」と「太田の街」を特集していて、それを読んで他の雑誌とは目線が違うなと思い、そのことについてもお話を伺いたいと思っていました。

古川：昨年太田フォトスケッチも KIKI さんが猫を撮影されていますよね？

KIKI：はい。昨年フォトスケッチのテーマが「まちかどの猫」で、美術館・図書館が開館する前だったので近くのまちかど美術館(現・まちかどふれあい館)というところで写真展をさせていただきました。

古川：僕も昨年、写真展を拝見しました。高校時代に野球部の練習試合で太田市に来たことはありますが、街をじっくり歩くのは初めてで、街の歴史やスバルの歴史など知って、街並みを見て楽しかったです。

あらためてまた今年来て、美術館・図書館が新しく出来たことで人の動きが変わったように感じました。

KIKI：そうですね。私も昨年の展覧会がきっかけで初めて太田市に来て、1年ちょっとですが、美術館・図書館が駅前に出来たことによって、駅を降りた時の風景や、人の流れが違います。

古川：そうですね。市民の方が羨ましいです。午前中に来て美術館・図書館の中を一周してみて、本当に気持ちの良い空間が出来上がっていて、こういう場所があると街も活性化していくので、これから楽しみな街だなと思いました。

KIKI：今回の写真展ですが、「カメラを通し、太田のまちを新たな視点で再発見する」ということが目的です。私の作品も公募展の作品も太田市内で撮られたもので、今回私自身も取材させていただきました。

古川：先ほど作品をじっくり拝見しましたが、皆さん写真がお上手ですね。

KIKI：そうですね。KIKI 賞を選ばせていただいたのですが、かなり悩みます。

古川：僕も勝手に「賞をひとつ選ばなくてはいけない」という目線で、見てまわったのですが、選べないなと思いました。



KIKI トークショー

古川：では、僕が進行役をさせていただいて KIKI さんに撮影された写真を見ながら答えていただくという形式で進めさせていただければと思います。よろしくお願いします。

KIKI：今回展示している写真も入っていますし、展示していない写真も入っています。

《以下右側の KIKI 撮影写真を見ながら進行する。》

(新田パン-1)

KIKI：これは新田パンの写真ですね。煙突があってまるで銭湯の様な外観ですが、右が小学校でその奥にあるのが新田パンです。パンの販売もして後ろがずっと工場になっています。新田パンの写真を最初にもってきたのは、「オズマガジン」のアート特集の時。

古川：そうですね。「100年を越えた新田パン」と「1年目の太田市美術館・図書館」の対比を書かせていただきましたが、街の人からすると「昔からあるパン屋さん」という感じですよ。

KIKI：学校給食にもなっているそうですね。

古川：はい。古いものを見て素晴らしいと思って、そこから取材させていただきました。KIKI さんもそれを見て？

KIKI：そうです。「オズマガジン」の特集で新田パンの存在を知りました。新しいものも素敵ですけど 100年続くパン屋さんがあるというのは知らなかったです。続いていることがすごいなと思ったので、是非ここは行きたいと思ったのと、あとビジュアルがすごくカッコいいですよ。

古川：カッコいいですよ。

(新田パン-2)

古川：このフォントとかも。古いものがそのまま残っていて。

KIKI：その正面に「NITTA BEKARY」とローマ字で看板があって、中でパンを作っています。

(新田パン-3)

KIKI：たまたま私が行った日は、少量でいろいろな種類のパンを作っている日で、1人の方が様々な作業を順番にやりました。若い方から年配の方まで幅広い年齢層の方が働かれていて、その手作業の繊細さとスピード、機械の扱い方に目が釘付けでした。



(写真) 新田パン-1

© KIKI



(写真) 新田パン-2

© KIKI



(写真) 新田パン-3

© KIKI

(新田パン-4・5)

KIKI：栄養パンというパンが最後の袋詰め作業をへて、出てきたものです。袋をすごく触って、空気圧を見ていて、袋がパンパンになりすぎずパンがつぶれないくらいの、ちょうどいい空気圧を微調整されていて、買う側は意識しないところまで気を配っていて、まさに職人技だなと思いました。

古川：まさに「手」ですね。そもそも、今までのKIKIさんの写真では、人物の写真を撮ることはあまりなかった印象で、どちらかというと山などの風景写真や光をうまく使った写真を撮ることが多かったように思います。

KIKIさんはモデルをしながらずっと写真を撮られていて、写真の腕もプロの方に並ぶと思いますが、今回人を撮る難しさというのはありましたか。いつもはあまり撮らないですよ。

KIKI：どちらかというと、人を撮るのに苦手意識がありました。それ以前に自分が写真を撮りたくなる場所は山が多かったので、街の中で写真を撮ることは少なかったです。

KIKI：今回、フォトスケッチのテーマ「て・あし・まち」に沿うような形で作品を作ろうと思いました。昨年太田市に来たときは風景を撮った作品が多かったのですが、そこで色々見てまわる中で、太田市はスバルの存在が有名ですが、実際に街を歩いてみると、スバルに限らず、「ものづくり」に対して特に主張するわけでもなく、普通の物事を丁寧に作って仕事をされている人や場所が多いなという印象がありました。だからこそ新田パンのような100年続くお店があったり、新しい場所を含めすごく誇りをもって仕事をされている印象があります。今回、必然的に「人」、「仕事をしている場所」を写真に収めたくて取材させていただいた現場ばかりなので、どうしてもそこで人が多くなってしまいうため、撮れるのかな、という不安が最初がありました。

古川：ではそのお題をいただいた後、来てみるまでは、自分が手仕事を撮るとかそういう感覚はまだ分からない中で。

KIKI：はい、不安が大きくて。

やはり室内での作業が多いので、そうなるべくとも使っているカメラが何台かありますが1番作品を作るのに使うのがライカのフィルムカメラです。

ただ、やはりフィルムカメラで室内を撮影するのは相当な無理があり、明るさが足りないのと、あとスピード感も必要になってくるので、今回はフィルムカメラも持って行きつつデジタルカメラでも写真を撮ろうと決めて行きました。

古川：では、2台持ちで。人物の写真などはデジタルで撮っていますか？



(写真) 新田パン-4

© KIKI



(写真) 新田パン-5

© KIKI

KIKI：今回、フィルムの方のカメラはモノクロのフィルムを入れて撮影をしました。

デジタルの方はカラーで撮っていますが、なんでモノクロにしたかという、カラーよりもモノクロの方が動きが目に入ってくるんじゃないかなと思ったからです。

古川：確かに、KIKIさんのモノクロ写真あまり見たことがなかったので新鮮でした。ではカラーのものはデジタルで？

KIKI：そうですね。たまにデジタルで撮ってモノクロに変えているものもありますが、基本的にはカラーのものはカラーで使っています。

(竹澤畳店-1・2)

古川：では先に進ませていただきたいと思います。次は畳屋さんですね。

KIKI：はい。竹澤畳店さんという畳屋さんです。ここは伝統的な畳の作り方や、畳の張り替え作業も行うのですが、伝統的なことを守りつつ機械を使って作業をしています。竹澤さんがすごく謙虚な方で、機械が全部やってくれるから「自分なんか…」とおっしゃっているんですね。でもこの機械、誰もが使えるものでもないし、機械が作業するとはいえ、その機械を使うまで繊細な作業が沢山あって、また機械の使い方も丁寧に使わないと畳も綺麗に張れないと思います。

(竹澤畳店-3)

古川：綺麗ですね。本当に。

KIKI：畳屋さん自体はその存在を知らないと入れない感じの建物でして、その一つの大きな空間の中で作業をしています。

古川：とってもモダンな感じですね。この柄とかも可愛いですね。

(竹澤畳店-4)

KIKI：そうですね。畳屋さんにも初めて行ったので、うちにも畳がありますが、あまり意識したことがなかったなど。

古川：こういう伝統というか、地元で長くやっていらっしゃる方の畳が家にあったら素敵なことですね。

KIKI：そうですね。畳も張り替えたり、手入れの仕方もあるそうです。私も賃貸の家に住んでいると畳は手入れしない。入ったときに新しくても出るまでに張り替えたり、返したり



(写真) 竹澤畳店-1

© KIKI



(写真) 竹澤畳店-2

© KIKI



(写真) 竹澤畳店-3

© KIKI



(写真) 竹澤畳店-4

© KIKI

もしないので、作っている場面を見てもっと大事にしないとイケないな、これから大事にしたいなと思いました。

(竹澤畳店-5)

古川：市を挙げて取り組んでいる太田フォトスケッチで市の魅力が掘り起こされていく感じもいいですね。

皆さんがご存じなかった畳屋さんのことを写真で知って、みんなでいいねと言い合うとか、そういうことができると本当に素敵だなと思いました。これは「ぐんまちゃん」ですね。

KIKI：畳の縁（へり）も沢山扱われていて、縁は畳屋さんが企画・デザインして発注して作ってもらっているそうです。それで竹澤畳店では、「ぐんまちゃん」の畳の縁を作っているそうです。

古川：いいですね。畳の張り替えをお考えの方は、ぜひ参考にしてみるのもいいですね。本当にフォトスケッチをきっかけに街が活性化していくのは素敵ですよ。

(竹澤畳店-6)

古川：これは何ですか？

KIKI：これは畳の井草ですね。ご自身で熊本の井草を編んでみたそうです。やはり井草の質によっても畳自体がすごく変わるらしくて、こういう井草と分かる状態で見ると1本1本がストロー状になっています。

古川：こうやって作るのですね。職業病ですけど私も取材に行ってみたくまりました。

KIKI：私が写真を撮っていると、「ちょっと試しに作ってただけだよ」とおっしゃっていて、すごく謙虚な方だなと思いました。

古川：謙虚ですね。

KIKI：すごくいいなと思いました。

(島岡酒造-1)

古川：ここは酒蔵ですね。

KIKI：そうですね。ここは島岡酒造さんで群馬泉などを作っているところです。私すごくお酒が好きで、昨年太田市に来る前にたまたま群馬泉を飲んで美味しく、太田に来ることになって時、島岡酒造は確か太田にあったはずと思って。

古川：覚えていたんですね。私、知らなかったですが酒蔵がある



(写真) 竹澤畳店-5

© KIKI



(写真) 竹澤畳店-6

© KIKI



(写真) 島岡酒造-1

© KIKI

のですね。お水が綺麗ということですか？いい水が流れていないとお酒が造れないと思いますが。

KIKI：そうですね。群馬は水がすごく豊かなイメージがありますね。

(島岡酒造-2)

KIKI：これは去年撮影させていただいた時の写真です。島岡酒造は10年前くらいに一度火事になって蔵が全焼してしまったそうです。これは新しい蔵だそうですが、新しい蔵の中にも、古い樽があるから、きっと酵母がちゃんと残っていて新しくできた場所を覆っていつているような感じがして、菌が生きている雰囲気を感じられる蔵でした。

古川：行ってみたいです。

(島岡酒造-3)

KIKI：これはお酒を仕込むときに使う道具です。色々な形がありますが、一つ一つ杜氏（とうじ）さんが、こういう形があったら良いかき混ぜ方ができるんじゃないかと考えながら手作りで作った道具だそうです。

古川：この「手」というテーマだけれど、手を写さなくても「手」を感じられるというのはKIKIさんならではの解釈の仕方だなと思います。

(今井酒造-1)

古川：これは何ですか？

KIKI：ここは今年伺った別の酒蔵で、今井酒造さんです。

古川：市内に酒蔵が2か所もあるのですね。

KIKI：もっとあるかもしれないですね。

今井酒造さんは、喫茶室もあり重要文化財になっている古い蔵（お酒を造っているところとは別の蔵）の中でイベントをやったりしていますが、ここでは作っている現場というよりも、「古い痕跡」を撮らせていただきました。

古川：行ってみたいです。

(今井酒造-2)

KIKI：これは昔、焼酎を仕込んだ壺だそうです。今は使っていないということです。



(写真) 島岡酒造-2

© KIKI



(写真) 島岡酒造-3

© KIKI



(写真) 今井酒造-1

© KIKI



(写真) 今井酒造-2

© KIKI

(今井酒造-3)

KIKI：これはもともとお店があった母屋の方の玄関の軒下です。

これはお札ですかね？

古川：守り神ですかね？

KIKI：お店の人に伺っても、分からないそうです。太田独特という
ものでもないのですね。

古川：可愛いですね。



(写真) 今井酒造-3

© KIKI

(OTA FACTORY-1)

KIKI：これは場所が変わりまして「OTA FACTORY」というところ
です。ご存じの方も多いと思いますが、スイーツを扱って
いるお店があり、イベントやワークショップも色々やられて
います。

女性3人が立ち上げた場所ですがそのうちの1人が、
中島農園の野菜の袋詰め作業をここでやっていて、お話を
伺ったところ、午前中に集中して作業されるそうです。
スイーツショップのプリンもすごく美味しいです。

古川：「OTA FACTORY」のプリン、美味しかったですね。

KIKI：プリンに使われている牛乳は、東毛酪農で作られている
低温殺菌のもので、学校給食の牛乳になっているところ
もあるそうです。そんな美味しい低温殺菌の牛乳が学校
で飲めるなんて本当にうらやましいです。

古川：豊かですね。図書館にしてもそうですけど、地産地消と
いうか昔からのものがちゃんと残っていて、良い街ですね。
もっとゆっくり歩いてみたいです。



(写真) OTA FACTORY- 1

© KIKI

(OTA FACTORY-2)

KIKI：このルッコラいただきましたが、すごく美味しかったです。

古川：これは僕らが普通に行って買えますか？

KIKI：ここの場所では販売していないそうです。

古川：では市内で流通しているってとこなんですかね。

KIKI：と思われます。



(写真) OTA FACTORY- 2

© KIKI

(山田屋本店-1)

KIKI：焼きまんじゅうです。

古川：僕も群馬県の焼きまんじゅう大好きで、東京に出たらみんな焼きまんじゅう知らなくて、びっくりしました。全国で食べられている食べ物だと思って焼きまんじゅうの話をしていたら、みんなポカーンとしていて。でも群馬に帰って来るとこれが食べたくなる。昔は、僕らが小学生の頃、お祭りで出店が出ていて、100円だったので、お小遣いで買って食べました。本当に美味しいですね。

KIKI：美味しいですけど、最初はやっぱり驚きました。まんじゅうじゃないみたいで。

古川：パンみたい。

KIKI：パンみたいですよ。ふわっとしているつもりはなくて噛んだので、最初はショッキングでしたね。

古川：どうですかお好きですか。

KIKI：今はすごく馴染んでいるお味で、好きです。



(写真) 山田屋本店-1

© KIKI

(山田屋本店-2)

KIKI：去年、今年と撮影させていただいた山田屋さんです。もともと麴屋さんだったそうで自家製の麴を生地に使っているから、このふわっと感が発酵するときに出るそうです。

古川：なるほど。

KIKI：ここは焼き上げてからたれをつけているそうです。つけながら焼かないで、さっと強火で香ばしく焼いて、後からたれを塗るっていうのがこだわりだそうです。

古川：ここは駅から近いのですか？

KIKI：駅から、ちょっと遠いです。

古川：遠いのですか。食べたいです。帰り寄れるかな。



(写真) 山田屋本店-2

© KIKI

(山田屋本店-3)

KIKI：ここお土産用の焼きまんじゅうもあって、それは焼いた状態ではなく、まんじゅうが真空パック状態にあって、たれと小さい竹でできた刷毛がついていて、自分で焼くようになっています。

古川：なるほど。ただ、家帰ってやってもこういう風にできませんよね。

KIKI：いや、意外と簡単です。焼くコツとかも教えてくれるので。



(写真) 山田屋本店-3

© KIKI

古川：なるほど。見てると焼きまんじゅう食べたくなってきちゃいますね、この後。KIKIさんの写真の特徴というか、いつも思いますが、光の入れ方がちょっとアンダーで暗いというか、これは少し意識して撮っていますか。

KIKI：今回はそうですね。意識して撮っています。じっくりみてもらいたいなと思って。

古川：その辺の意図としては、街並みにアンダーな感じが合っていたんですか？もうちょっとこういうものを撮るときは、明るくしますが、これは自分で見ている目線よりちょっと落としている感じがしますが、そんなこともないですか？

KIKI：多分私はこういう目線で见ているんだと思います。

古川：そうかもしれないですね。KIKIさんの写真のちょっと特徴的なところは、少しでもアンダーな感じですね。

KIKI：そうかもしれないです。

古川：モノクロにして見てもそういう感じがあります。

(山田屋本店-4)

KIKI：これも山田屋さんのショーケースの中のもの撮った写真ですが、中に古い昔の写真が飾ってあって、これも皆さん、お店に行ったら面白いので見てください。左奥に山田屋さんが写っていて、手前右に戦車があって、いつぐらいの写真なのかなって思います。

古川：おお。

KIKI：戦前でしょうね。地面もまだ舗装されていなくて、なかなか雰囲気がある写真が飾ってあったりします。

古川：是非見てみたいですね。人形も無造作にありますけど、見たことある感じですよ。

KIKI：呑龍様って呼ばれているお寺がありまして、そこの近くにいます。この写真の真ん中に呑龍っていうカップがありますけど。上毛かるたはご存知ですか？

古川：はい。上毛かるたも群馬県独特ですよ。僕らも子どもの頃、よくやりました。全国的な文化かと思ったら、そうでもなくて。

KIKI：群馬独特の文化って結構ありますよね。

古川：本当にそうですね、言葉使いもそうですし。僕、結構かるた強かったんですよ。

KIKI：夫が群馬出身で、結婚して3年の間に上毛かるたを大分覚えました。

古川：僕は実家が埼玉ですが、埼玉県が群馬の上毛かるたが羨ましくて「埼玉郷土かるた」を作って広めようとしています。ただ、「郷土かるた」はあまり浸透してなくて、伝統の力ってすごいですね。上毛かるたはどこへ行っても、お土産になっていたり、お菓子になっていたりするので、誇るべき伝統ですね。

KIKI：呑龍様を含め、いろんな場所を覚えました。

古川：覚えますよね。そういうところが群馬県の良いところですね。地元の方が好きですね。



(写真) 山田屋本店-4

© KIKI

<暁工業>

(暁工業-1)

KIKI：ここは場所が変わりまして、暁工業という、スバルの下請けなど、色々なものを作っている工場です。普段行くことがない場所なので、作業しているところを撮影する時は、お邪魔になってはいけなないのでドキドキしながら行きました。皆さん手元を動かしながら、顔はすごく穏やかでした。

古川：余裕がある感じですかね。

KIKI：写真を横で撮っていても全く嫌がらずにそういう気配を全く出さずに作業を続けられていました。

主催者：工場の社長さんは、金属加工以外の職業もされていて、当館のカフェの経営もされています。

古川：これは皆さん周知の事実なのですか？地元の方がカフェの経営もされているっていうのはいいですね。

KIKI：みなさんまだ行かれていない人は是非行っていただきたいです。「キタノスミス」というお店で、お店は市内に2店舗あります。まゆパン工房さんという、パン屋さんのパンも入っていて、毎日空いているお店ではないので、なかなか買う機会がないですが、このカフェだったら食べられます。

古川：新しいガイドブックができそうです。まちの案内などが作れたらいいですね。

KIKI：太田美術館・図書館は展覧会を見に来る人がいると思いますが、私、地図作りが好きなので、そこから太田の街の中に足を延ばすきっかけになるような、ここを中心とした、車ではなく歩いて楽しめる街歩きの地図が作れたらいいと思っています。

古川：地元の方が当たり前のことですが、ちょっと東京から1時間かけて離れた場所から来たら、新鮮なことが多くて、今これを拝見しているだけでも行ってみたいところが、かなりできたのもう一回来てみたいと思います。



(写真) 暁工業-1

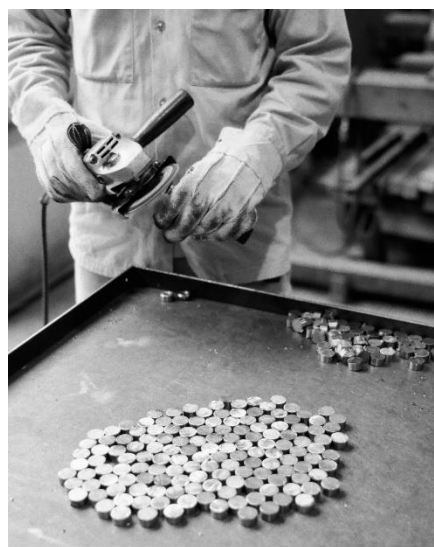
© KIKI

(暁工業-2)

古川：これは何の部品ですか。

KIKI：なんの部品かは伺わなかったのですが、ひたすらこの表面をたいらにしていました。

今回の作品の取材をさせていただいた場所は、誰もが入ることができる場所ではなく、行けない場所が多かったのですが、太田の中でこういった作業をされている仕事があることを知ってもらえたらいいなと思います。



(写真) 暁工業-2

© KIKI

(暁工業-3)

KIKI：これも暁工業なのですが、突然文具店の倉庫の様な風合いだな、と思っています。

古川：箱が素敵ですね。

KIKI：これから出荷される、加工された金属が紙に包まれている出荷待ちの倉庫です。

<山岸バラ園>

(山岸バラ園-1)

KIKI：これが最後の場所です。

古川：バラですか？

KIKI：バラ園です。多分このバラ園は知っている人も少ないと思いますが、山岸バラ園というところで、山岸さんという高齢の男性が一人でされています。先ほど紹介した「Ota Factory」から歩いて5分位の場所です。この方が一人でずっと作業されていて、特に公開もせず趣味でやっているそうです。

古川：趣味で。

KIKI：ここのご近所では散歩の名所になっていて、みんなもっと観たいなと思っていたところを「Ota Factory」の人が働きかけて、自由に見てもいいように分かりやすい看板を立てたりして一般公開するようになったそうです。

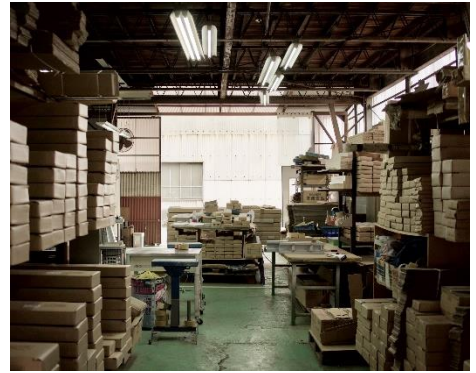
古川：「Ota Factory」の方が「まちおこし」というか、まちの再発見、掘り起こしをしてくれたんですね。

(山岸バラ園-2)

KIKI：そこだけで終わらないで、知ってもらって、人との繋がりをすごく大切にしている方たちなのでバラの手入れの作業の仕方のワークショップをこの場所や、「Ota Factory」でやったり、いろいろワークショップやイベントを予定されているそうです。

古川：僕らも仕事柄、全国各地に行きますので「Ota Factory」さんのような、「繋ぎ手」が現れ始めると、まちがぐるぐる回り始めるので、「Ota Factory」さんがそういう役割になりつつあるのかもしれないね。

KIKI：本当にここのバラ園だけでなく、この周りに梅林などがあるそうですが、持ち主が高齢で手放されたりしていて、市が管理したりしているそうです。梅もぎや梅の仕込みをしたいという人はいると思うので、もうちょっと市民



(写真) 暁工業-3

© KIKI



(写真) 山岸バラ園-1

© KIKI



(写真) 山岸バラ園-2

© KIKI

の人に広がって場所を守るとともに、もっと愛着をもっていただけるといいなとおっしゃっていました。

古川：コンテンツが本当に沢山ありますね、この太田の中に。

KIKI：そうですね。

(山岸バラ園-3)

古川：この写真が KIKI さんの写真ですね。これが一番 KIKI さんっぽいなと思ったのですが。

KIKI：こういう写真が今回少ないですね。

古川：いつもよりは、人を撮っている写真が多くあって新鮮でした。

それから、名前が写真になくても KIKI さんの写真だなんて僕には分かるようになってきました。「オズマガジン」を撮ってもらっている川島小鳥さんという写真家の方も、名前がなくとも本人の写真だなんて分かるんですけど、今は KIKI さんの写真も僕はだいたい当てられると思います。

バラの写真のバラに葉っぱがかかっていますよね。ちょっと葉っぱを避ければ、バラだけで撮れますよね。でもこの葉っぱがかかったまま撮っていることとか、ピントの当て方とか、光の色味がすごく KIKI さんっぽいなとっていて、そういうのが写真の面白いところだと思います。



(写真) 山岸バラ園-3

© KIKI

<「て・あし・まち」公募作品の感想>

古川：今回みなさんの写真を拝見していて、本当に性格が出ていますよね。

「この人きっと、優しい人だな」とか。

KIKI：本当に写真に出ますよね。

古川：あとは「手」、「足」となった時、皆さんお子様の写真を撮ったり、それぞれの視点が分かれています、「手」から連想するものが色々あるんだな、と改めて感じました。

古川：今回、自分以外の写真を見てどうでしたか？

KIKI：本当に皆さん上手だなというのと、やっぱり色々な写真の撮り方があって、人それぞれでいいなと思います。私が今回、公募展の賞を選ばせていただくという立場で写真を選んだので、その他にも良いと思う作品が沢山ありました。

古川：なるほど。改めて写真を通して「新たなまち」というのを静止画で見て、太田の街に対してどのような印象をお持ちになりましたか。

KIKI：すごく声高に言うわけではなく、地元をちゃんと見守って、愛しているんじゃないかなと思いました。

古川：僕も去年に引き続き、今年も太田の街を散歩させていただいて、皆さん黙々とやるべき事をやっていて、それがまちの雰囲気につながっているという感じがすごくしたので、改めて自分の目で見て、僕も写真を撮ってみたいなと思いましたね。

KIKI：主張しすぎず、私の目線で見たい太田の在り方かなと今回の写真は特に思います。

古川：皆さんと一緒に写真展を作る感じや、飾った作品を皆さんで見ている感じとか、場所があるからこそ出来ることで、去年はまちかど美術館（現・まちかどふれあい館）でしたが今年はさらに規模が大きくなって、ここで素晴らしい展示だったので、こういうのが続いていくと豊かな文化だと改めて思って、僕らの街でもやってみたいなと思います。

KIKI：そうですね。いい場所ですよ。

古川：いい場所ですね。市民の方も参加して、そういう継続性がまちの文化を作っていくような気がするもので、是非来年こういう企画があったら、ゆっくり見たいと思いましたね。今回、改めて太田のことにすごく興味がわきました。また近いうちに来ようと思います。

KIKI：太田に来るようになったきっかけがこの場所で、オープンする前と後を知っているので、本当に感無量です。こうして展覧会をさせていただいたり、イベントでみなさんにお会いする中で、私が伝えるべきことは、作品と本日のトークショーで伝えられたと思うので、みなさん是非、家に帰って家族やお友達や仕事仲間にこういう場所があるよとか、この美術館もそうですけど話して繋げていってくれたらいいと思います。

古川：本当にあつという間でしたが、KIKIさんどうもありがとうございました。

KIKI：ありがとうございました。